

養成校と中学校（小学校）との連携



神戸常盤大学
KOBE TOKIWA UNIVERSITY



この事例のポイント

神戸常盤大学
ホームページ

- ・小学校と大学の双方のニーズをかなえる連携活動の設計
- ・大学生主体／複数回実施により、学びの深化と関係性を形成
- ・自然環境を活かした実践的体験が、子どもと学生両者の学びを促進

この取組を行った背景や目的

本取組は、大学生が子どもにふれ合う実践的な学習機会を設けたい本学のニーズと、環境体験学習の校外実施先を確保したい小学校側のニーズとを同時に満たすような相互連携活動を企画したことに始まりました。神戸地区全体で保育学生が減少しているなか、大学での学び(保育の学び)やキャンパスの魅力を少しでも感じてもらうことで、10年後の本学の学生、15年後の保育者へつなげていければと考えています。

連携活動① 10/7(火) 蓮池小学校3年生 環境体験学習で来学

対象:神戸市立蓮池小学校3年生 約70名

方法:近隣小学校(歩いて5分)の小学生を8グループに分けて、各グループに大学生も加わり、ネイチャービンゴなど学生が企画した活動で一緒にふれ合いました。

内容:本学教育学部こども教育学科4年生対象選択科目「生き物と自然の力」履修学生10名と小学生との連携活動。当日は学科教員の指導のもと、学生とともに「ときわの森」でネイチャービンゴを行い、身近な植物や生きものを観察しました。子どもたちは、楽しみながら自然環境への関心を高め、環境について考える機会となりました。



連携活動② 11/18(火) 「ときわの森」で竹細工に挑戦！

対象:同上(神戸市立蓮池小学校3年生 約70名)

方法:学生と教員のサポートのもと、小学生がのこぎりを使って竹を切り、コップやベン立てなどの作品づくりに取り組みました(道具の使い方や安全面にも配慮しながら)。

内容:大学の森を活用した自然体験活動として、未就学児から小学生までを対象とした「子どもの遊びの広場」の実践を小学生にも体験してもらいました。竹などの自然素材を用いたものづくりを通して、子どもたちは自然に親しみながら創造する楽しさを味わいました。活動後には、「のこぎりはむずかしいけど楽しい」「自分で作れた」といった声が聞かれ、主体的に学ぶ姿が見られました。



実践するためのヒント

○成功や継続するためのポイントや要因

・お互いのニーズがどこにあるのか話し合う

- 小学校側が大学に求めていることと、養成校側が小学生に見せたいことを明確にします
- 今回は双方の関係者が知人同士だったため、本音で話し、互いの要望を実現できました

・1回だけの活動にしない(教員×大学生×小学生:複数回の良さを活かして)

- 連携活動1回目は、互いに知り合う程度が限界です(今回は大学敷地案内のみ)
- 2回目でもう少し互いが入り込むような活動を用意し、3回目(予定)への期待を高めました

・学生が主体となる活動(大学4年生対象授業の強み)

- 履修の段階で、子どもに関わる授業と説明(積極的に関わりたい学生が集まる)
- 小学生にとって大学生のお姉さんお兄さんは近い将来を見せてくれる先輩(親しみが湧く)

○実施体制について

- ・交流中心の事業のため、必要経費は最小限(材料費など)
- ・企画調整課(地域連携担当)が、小学生に配付するクリアファイル、学生のお弁当を支出

○今後の取り組みの方向性

- ・「大学に行った」「何か作った」という単発の活動にせず、連続性と活動の広がりを意識したい
- ・小学生の活動する様子を学生がドキュメンテーションにし、小学校や附属幼稚園に渡すなど、縦のつながりも意識していきたい
- ・大学の敷地内にある学校菜園で小学生・大学生が一緒に野菜を育てるなどしていきたい